

「只見 移住物語」

只見町役場 地域創生課 ユネスコエコパーク推進係

ブナセンター主任指導員・只見ユネスコエコパーク推進協議会事務局

農学博士

【移住者のご紹介】

- ・お名前：中野陽介 様 (33 歳)
- ・ご家族：妻 (36 歳)、長男 (4 歳)、次男 (3 歳)
- ・いつ：2012 年 4 月
- ・どこから：新潟県 新潟市
- ・どこへ：奥会津学習センター (現在 大字 只見)
- ・いましていること：只見町役場 地域創生課 ユネスコエコパーク推進係
只見ユネスコエコパーク推進協議会事務局
- ・まえにしていたこと：大学院 修士課程 大学生



只見町役場 地域創生課 デスクにて撮影

【始まり】【準備】

移住する前の生活は、普通の学生生活です。ただ私はサワグルミの多雪環境への適応を調査、研究していましたが春から秋にかけて長期間 佐渡島でフィールドワークをしていました。当初大学近くのアパートを借りていましたが佐渡島での生活が中心になるため、大学院生になるとアパートを引き払って新潟市内の母方の実家へ荷物を置かせてもらっていました。

大学院修士課程の修了が近づいた頃、私の指導教官から「只見町に面白い仕事があるよ」と教えてもらいました。只見町がユネスコエコパークへの登録検討を進めていた時点で申請作業に関する人材を探していたのです。

只見町のことは知っていました。只見町へ就職する 2012 年の前年、2011 年に只見町を訪れていました。たまたま私の研究室の後輩が只見町の出身で、只見町でユビソヤナギの調査を行うというので、手伝いのために只見町を訪れました。これが私と只見町との最初の出会いです。

この地域の雪の環境も、場所的にも面白いところだと思いました。ユネスコエコパークのお話しにも興味があったので指導教官の勧めもあり、只見町の学術調査専門員に応募しました。選考試験には面接と小論文があり、2012 年 3 月役場から採用の連絡を受け、大学院修士課程の修了後 只見町へ引っ越しました。

只見町の最初の住まいは役場が紹介してくれた奥会津学習センターという高校生寮です。「家財道具とか何も持たなくていいからとりあえず来て」と言われ、大学院の修了式を終えた直後でばたばたしていましたが、奥会津学習センターへ引っ越しました。

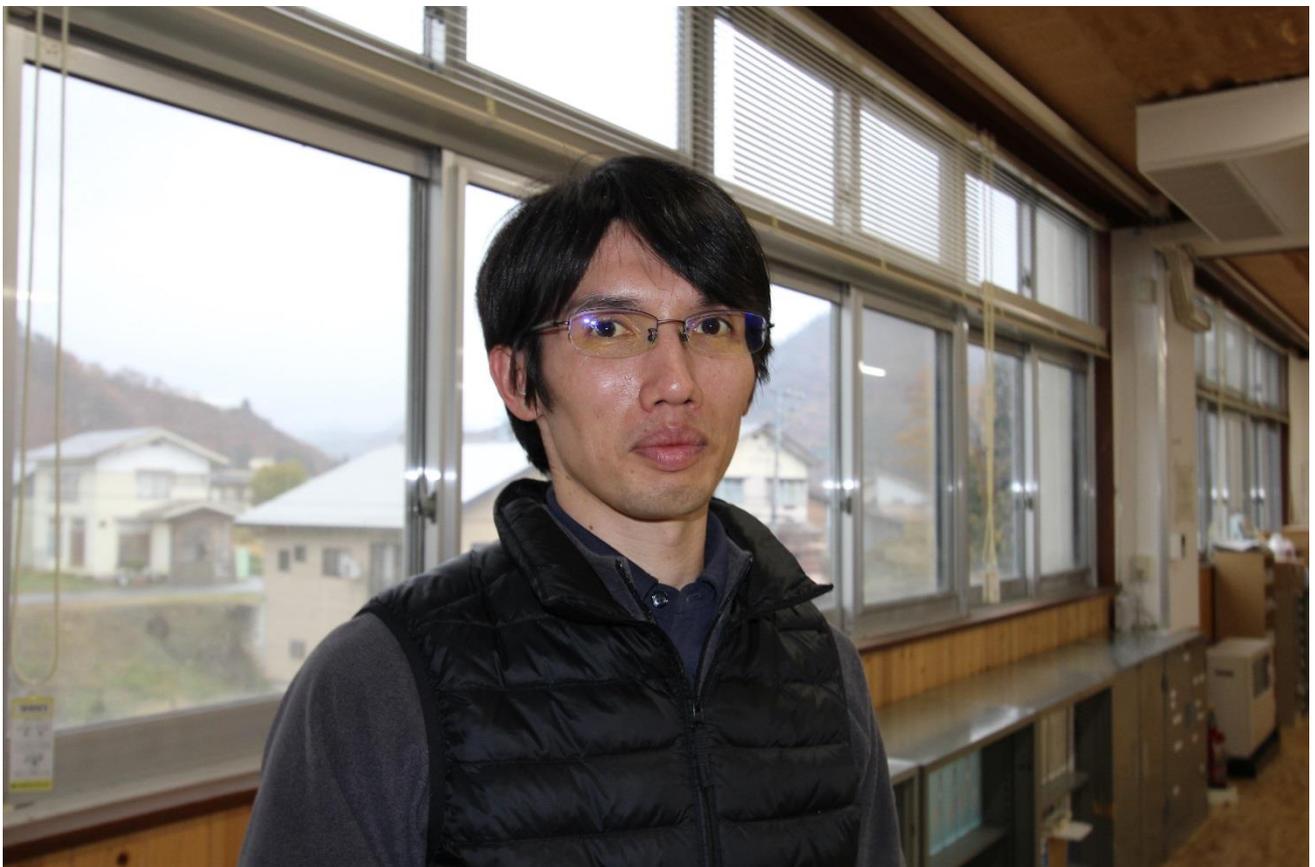
奥会津学習センターの部屋は、高校生が居住する部屋と同じ作りの和室でした。机と椅子はありましたが、他には何もなかったので、母の実家から冷蔵庫を持ってきました。食事も高校生と一緒に食べればよいと言われましたが、食事の時間が決まっているので、ほとんど利用できませんでした。

嘱託職員という身分で、学術調査専門員となり、地域創生課へ所属となりました。翌 2013 年に只見町 職員試験を受け正職員として頂きました。エコパークに関する業務には自然に関する専門性が求められることや対外的に専門家の方とお付き合いすることも多く、私自身の専門性を高める必要性を感じるようになりました。就職して 3 年後(2015 年)にかつての指導教官の勧めや当時の上司の理解を頂き、社会人学生として在職しながら博士課程へ入学し、博士課程 5 年を経て 2020 年 3 月 (2019 年度) サワグルミの研究で農学博士号の学位を得ることができました。

【家族】

私の実家は千葉県ですが、学生時代から親元を離れていたため只見町で働くことについて報告をしましたが、事前に相談という事はしなかったと思います。おそらく両親は只見町のことはあまり知らなかったと思います。只見町役場で勤務することが決まった時点では、まだ独身でしたが、当時 交際していた妻には話をしました。反対はされませんでした。

2011年に只見町を訪れたこともあり、事前に情報も得ていたため、只見町に来ることについて不安に感じたことはありません。只見町に来る前は、佐渡島の北のはずれにいて、そこは近くにコンビニもなく、若い人に会うこともほとんどありませんでしたから。そんな環境に慣れていたので、不安に思う事は全くありませんでした。



只見町役場 事務室にて撮影

【現在】

今していることを一言で言うとユネスコエコパークの管理運営に関する事に携わっています。より具体的に言うと自然環境・野生動物の保護・保全調査・研究、地域振興とか、さらにはブナセンターの仕事で、非常に広範にわたります。自分の研究は自分のプライベートな時間でしています。博士号の研究論文にまとめた研究も、自分の時間をあてがいました。いま携わっている業務は、別に調査研究を専門にしているわけではなく、いわゆる一

般の行政職です。大学で学んだ専門性などは今の仕事に活かされていると感じていますが、先ほど言ったように業務の幅は非常に広範で、大学で学んだことだけではカバーできないところがあります。地域の方や外部の識者の方に学ばせてもらいながら仕事をしています。

【変化】

太平洋側で育った自分には雪というまったく未知の世界、雪の量が多い世界に入り、そこにある独自の自然や、生活文化を実体験できたことは、自分にとってもすごく貴重な体験、経験になりました。

移住して自ら変わったことではないかもしれませんが、自分のやりたいことに諦めをつけていません。自分のやりたいことを持ち続けています。そういう意味では、自ら変わったということはありません。

しかし、心の中で葛藤する自分にも気がついています。28歳（2015年）で結婚、家庭を持ちました。当然 家族のこと、子供たちの幸せを考えなければなりませんので、いまは答えが出なくても避けて通れない命題のあることを意識しています。自分が見たいこと、知りたいことは、この地にあるのですが、果たしてそれが家族、子供たちにとって良い事なのかを日々考え続けています。

【将来】

ここに来る一つのきっかけだったかもしれませんが、もともと自然のことを研究してきましたから、自然のことに関わりたいという強い想いはありました。佐渡島の限界集落(注1)にいた経験もあって、かつて人と自然との関わり合いが存在していて、それが高齢化の中で縮小して行く姿を見ました。

(注1) 限界集落 (げんかい しゅうらく)

過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭などを含む社会的共同生活や集落の維持が困難になりつつある集落を示す。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

しかし、人は必ずその住んでいる地域に寄り添って生きて行かなければならないのだろうと私は思っています。2011年に東日本大震災(注2)と、原発事故が起きたのを目の当たりにして「土地に生きる」ことをより深く考えるようになりました。

(注2) 東日本大震災

2011年（平成23年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による災害およびこれに伴う福島第一原子力発電所事故による災害。2万2,000人余の死者、行方不明者が発生。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

話題が少しそれますが、私は星野道夫（注3）という写真家が好きです。彼は、アラスカの自然や野生生物、そこに住む人々の営みを撮影していた写真家で、よく彼の本を読み、写真集を見ます。自分の中には自然の中で生きざるを得ない、言い換えればその土地で生きざるを得ない人間と言うものを、今後どのように考えてゆけばよいのかという疑問や問いかけが大きなテーマとしてあり、彼の写真集や著書に共感できるのです。その答えやヒントを知る、見つける手段として、ここ只見に住んでいるのだらうと思います。

（注3）星野 道夫

極北の自然とそこに生きる野生動物や人々の暮らしを取材し、時代とともに変わりゆくアラスカを写真と文章で記録した写真家、探検家、詩人。1996年取材のため滞在していたロシアのカムチャツカ半島南部のクリル湖畔に設営したテントでヒグマに襲われて死亡（享年43歳）。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

ですから只見町に自然と人間が結び付いている生活があると期待して来たのですが、やはりどうしてもこの地域が歩んできた歴史や様々な社会変化により、相当の部分が失われていました。

私が只見町に来た初めのころ、よく物事を知っている古老（爺様）がいました。山に木を切りに行くときに、山に対してごく自然と手を合わせるのですね。そのような事がだんだん見られなくなってきたというか、消えてしまいました。かなりの部分が無くなってしまった気がします。そのような時代というか、時間の流れによる変化を見ると、自分の中でいま言ったような世界を期待していただけに寂しさを感じます。

一方で、それは仕方がないことだとも理解しています。むしろ、これからそのようなものがどのように引き継がれてゆくのか、あるいは無くなってゆくのか、その中で私たちはどのようにして自然と付き合いながら生きて行けばよいのかという事を考えて行きたいと思っています。只見町に住んでいれば身を持って見たり、聞いたり、考える機会になるのではないかと思います。

【不便】【健康】

佐渡島のフィールドワークで慣れていたので、暮らし始めて困ったことは特にありません。いまはインターネットで、早ければ翌日には配送されますから、買い物にはあまり不便を感じたことはありません。町のスーパーの品ぞろえも、よく言えば“買い物に迷わなくていい”かみtainな感じです。日常生活で言うなら子どものオムツとか日常雑貨品が多少高い事ですね。

ただ子供のいる家庭では医療面で不便を感じると思います。幸いうちの子供は健康なので不便は感じていませんが病気がちだと通院は大変だろうと思います。ここで子供を産むときも不便はあると思います。

【アドバイス】

これから移住する方へアドバイスは“覚悟を持ってきた方が良い”と思います。何かしら、ここに住み、暮らすという目的を持っていることが必要かと思います。良くも悪くも厳しい環境ですし、只見に限ることではないでしょうが、期待していたものと違うこともあり得ます。そういったことがあるという事も含めて“覚悟を持ってきた方が良い”という事ですね。

【生活】

ご近所とのお付き合いで心がけたことは、可能な限り地域行事に参加しています。大学院 博士課程修了後には、消防団に入りました。

【印象】

研究フィールドでの多雪は経験していましたが、生活の中での多雪という事には慣れていませんでした。3月に着任して、4月にも降雪がありすごいところだなと思いました。学習センターの窓越しに見えた雪を湛えた浅草岳の姿が、吸い込まれるように美しかったことをよく覚えています。

2020年10月28日 町下庁舎にてインタビュー

インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博